

## 戦前の上海における浄土真宗本願寺派開教の足跡

——『教海一瀾』と『文化時報』の記事から——

小島 勝

第二次世界大戦前のアジアにおける浄土真宗本願寺派の開教に関して、特に中国の上海の場合を取り上げて論ずることが本稿の目的である。本共同研究の課題は、アジア全域を射程にしているが、その第一歩として、筆者自身が現在関心をもっている上海に関する記事を蒐集し若干の考察を加えることにより、その責任の一端を果たしたいと思う。これからも順次、記事の集成範囲を拡大してゆく所存であるが、現時点では、記事の蒐集に予想以上に時間を費やしたこともあり、また与えられた紙幅の関係もあるので、一つ一つの記事を吟味する余裕がない。したがってここでは、『教海一瀾』と『文化時報』における関係記事を抜粋・列挙し、浄土真宗本願寺派の上海開教の歴史的脈絡や意義については、改めて論じたいと考えている。本研究課題遂行の第一歩であることを、予めお断わりしておきたい。

また「宗教新聞における記事」という点から言えば、この二紙に限らず、『中外日報』や『本願寺新報』、また『明教新誌』がある。さらに、上海においては、『上海日報』や『申報』の記事をも参照したいところである。上海に限ってみても、これらの記事を全て網羅して論じることが望ましい。しかし、浄土真宗本願寺派の上海開教についての、まとまった書物が今までにないだけに、これには膨大な作業を必要とするのである。

ともかくも、実際に『教海一瀾』と『文化時報』において、どのような記事が見られるのか。現状における抜粋した

結果から見てみることにしよう。

—

『教海一瀾』の記事

( ) 内は筆者による注

- |                                  |                                   |
|----------------------------------|-----------------------------------|
| 一八九九 (明治三二) 年                    | 一八九〇六 (明治三九) 年                    |
| 1・31 嗣法猊下の御渡清                    | 10・20 清国通信〔猊下御裏様上海御着御発〕 (三三三号)    |
| 嗣法猊下上海御安着の電報                     | 一九〇七 (明治四〇) 年                     |
| 2・11 支那御巡錫記 第一 神戸…長崎…上海 (三八号)    | 7・20 上海龍谷会発会式 (三七二号)              |
| 2・26 支那御巡錫記 (第二) 香港…上海 (三九号)     | 9・7 清人周文瑞氏来る〔龍谷会名誉書記〕 (三七九号)      |
| 3・11 支那御巡錫記 第三 香港…広東…上海 (四〇号)    | 一九〇八 (明治四一) 年                     |
| 3・26 支那御巡錫記 第四 上海…杭州…漢口…北京 (四一号) | 8・1 外信 清国通信 (承前) 在清国 橋瑞超 (四二六号)   |
| 4・11 支那御巡錫記 第五 上海…漢口 (四二号)       | 8・8 外信 清国通信 (承前) 在清国 橋瑞超 (四二七号)   |
| 5・15 社説 本派嗣法猊下の御帰朝               | 10・3 外信 清国通信 (前号の統) 橋瑞超 (四三五号)    |
| 支那御巡錫記 第六 漢口…北京 (四四号)            | 10・24 外信 清国通信 橋瑞超 (四三八号)          |
| 5・26 支那御巡錫記 漢口北京間紀事 随行員某 (四五号)   | 11・7 外信 清国通信 (統) 橋瑞超 (四四〇号)       |
| 6・11 論説 支那布教 (四六号)               | 一九〇九 (明治四二) 年                     |
| 6・26 支那御巡錫記 北京…天津…神戸 (四七号)       | 12・1 通信 鹏程随行之記 清国上海より 内田宏道 (四六五号) |
| 7・11 支那御巡錫記 長城紀行 随行員某 (四八号)      | 一九一 (明治四四) 年                      |
| 8・11 支那御巡錫記 随行員某 杭州 (五〇号)        | 11・1 武漢に於ける同胞慰問〔上海駐在藤山尊證〕 (五一号)   |
| 一九〇三 (明治三六) 年                    |                                   |
| 10・6 清国上海に御着〔御裏方〕 (三二一号)         | 11・15 清国動乱と本派本願寺 (五〇二号)           |

- |       |   |        |      |  |        |
|-------|---|--------|------|--|--------|
| 12・1  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・上海出張所の避難同胞</li> <li>・清国動乱と本派本願寺</li> <li>・漢口総領事館の謝状</li> <li>・慰問袋に対する謝状〔上海臨時部〕</li> <li>・清国学生の入港</li> <li>・清国留学生の感謝状</li> <li>・清人信徒の寄付</li> </ul> | (五〇三号) | 4・27 | 上海別院の新築定礎式   | (七六一号) |
| 1912  | (明治四五)年   |        | 1931 | (昭和六)年   |        |
| 2・1   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・清国動乱と本派本願寺</li> <li>・特設臨時部長の渡清</li> </ul>   | (五〇七号) | 5・20 | 本願寺上海別院の設置   |        |
| 3・1   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・清国動乱と本派本願寺</li> <li>・特設臨時部長の出発</li> </ul>   | (五〇九号) | 6・19 | 本願寺上海別院の落成慶讃法要   | (七七三号) |
| 1913  | (大正二)年  |        | 10・1 | 満州事変と本派本山  | (七七四号) |
| 4・1   | 上海教況  | (五三五号) | 1932 | (昭和七)年   |        |
| 1913  | (大正一二)年   |        | 2・5  | 本派上海別院に砲彈落下す   |        |
| 10・30 | 上海出張所の追悼法要  | (六八八号) | 3・7  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・前院下昵近の出発</li> <li>・從軍布教使の派遣</li> </ul> |        |
| 11・30 | 光壽会の活動  | (六八九号) |      | 本願寺上海別院砲撃は国際公法に違反(七八二号)  |        |
| 1914  | (大正一三)年   |        |      | ・院号法名下付  |        |
| 10・15 | 上海の時局と慰問  | (六九九号) |      | 日支事変と本派本山  |        |
| 1915  | (大正一四)年   |        |      | ・前大法主院下御活動   |        |
| 6・25  | 上海へ慰問使派遣  | (七〇七号) |      | ・慰問班を編成  |        |
| 12・23 | 光壽会本部移転〔上海無憂園内から大連へ〕  | (七一三号) |      | ・尊号老方を寄贈   |        |
| 1930  | (昭和五)年  |        |      | 桂本部長の上海慰問  |        |
|       |   |        |      | 日支事変忠死者追悼大法要   |        |
|       |   |        |      | 斯波特派慰問使の出発―松風五万枚と野菜等を満載して  |        |
|       |   |        |      | 武子女史の活動  |        |
|       |   |        |      | 武子女史婦朝   |        |
|       |   |        |      | 八雲船溪両氏送別   |        |

- |           |  |  |
|-----------|--|--|
| 5・10      | 両布教使の出発<br>上海事変講演会<br>軍葬を引受く<br>統制ある活動<br>砲弾雨裡の勇躍<br>必死的の活動<br>最前線の活動<br>目覚ましき慰問<br>自動車の急送<br>食料品の急送<br>大阪の慰問品<br>老百噸の食料品<br>醸金の運動<br>爆死せる肉弾三勇士への御扱<br>爆死せる五勇士野口上等兵へ御扱<br>院号法名下付<br>橋本曹長遺骨出迎<br>日支事変と本派本山 三勇士遺族津村別院へ参拝<br>大谷本廟に三勇士墓碑建設<br>飛行機にて上海古戦場を弔ふ 小笠原輪番八雲従軍<br>布教使同乗して 〃<br>戦死地跡の追弔会<br>上海別院の追悼法要<br>日支事変と本派本山<br>(七八四号) | 八雲布教使の帰朝<br>・遭難諸星へ見舞<br>肉弾三勇士の分骨を大谷本廟に納む―藤谷布教使護<br>持して入洛<br>(七八五号)   |
| 4・17      | (七八三号)<br>(七八四号)   | 6・19<br>上海別院降誕会<br>日支事変と本派本山<br>・上海別院の慰問品配給<br>三勇士墓碑建設に就て<br>日支事変と本派本山<br>・上海派遣軍の寄贈金<br>一九三三(昭和八)年<br>一九三三 上海別院女青バザー<br>一九三七(昭和一二)年<br>9・15 上海従軍日記<br>11・15 上海方面従軍記 上海臨時部日記 伊藤普行<br>上海臨時部<br>12・15 法王殿下は上海戦線へ 裏方は内地病院を御慰問<br>感激の門末に銃後の赤誠愈々高調<br>上海方面従軍日記<br>(八四七号)<br>(八四九号)<br>(八五〇号) |
| 『文化時報』の記事 | 一九二四(大正一三)年<br>6・8 上海から、香港まで 藤音得忍<br>(一一八号)  |  |

- |             |   |         |
|-------------|---|---------|
| 6・22        | 上海行(上) 遠山正導                                 | (一二五号)  |
| 6・24        | 上海行(下) 遠山正導<br>上海の対米講演会                     | (一二六号)  |
| 7・14        | 上海通信  | (一三六号)  |
| 9・22        | 上海より<br>江浙戦場に近き上海無憂園の近状                     | (一七〇号)  |
| 9・24        | 上海より  | (一七一号)  |
| 一九二五(大正一四)年 |   |         |
| 6・10        | 上海へ本派慰問使派遣 柱本瑞俊氏外二氏を<br>大谷光瑞師へ慰問品           | (二九六号)  |
| 6・18        | 動乱の上海から帰った本願寺特派の柱本瑞俊氏一行<br>談                | (三〇〇号)  |
| 6・20        | 上海みやげ 片山、雑賀二夫人から                            | (三〇一号)  |
| 6・24        | 上海通信  | (三〇三号)  |
| 一九二六(大正一五)年 |   |         |
| 7・14        | 支那における布教権問題                                 | (四九〇号)  |
| 一九二七(昭和二)年  |   |         |
| 8・17        | 上海から 北野丸にて 増山顕珠                             | (七六五号)  |
| 2・16        | 各地の奉悼 上海日本仏教団                               | (六〇八号)  |
| 4・1         | 上海動乱と避難邦人 本山から見舞金                           | (六四六号)  |
| 一九二九(昭和四)年  |   |         |
| 5・4         | 大谷光瑞師 四日出発上海へ                               | (一二七六号) |
| 一九三〇(昭和五)年  |   |         |
| 1・11        | 本派上海出張所移転新築 近く光瑞師が出張                        |         |
| 一九三二(昭和六)年  |   |         |
| 9・4         | 中華仏教会から仏連へ謝電 水害慰問に対して                       | (一九七九号) |
| 9・5         | 中華の大水災に財法の二施を捧げよ 仏連本部義援<br>の飛檄              | (一九八〇号) |
| 9・29        | 仏教連合会へ中華仏教会の謝状 民国大水災義援に<br>対し               | (一九九九号) |
| 10・21       | 南支各地の在留邦人を慰問 西本願寺から金品を贈<br>る                | (二〇一七号) |
| 11・18       | 排日の盛んな上海より 小笠原彰真                            | (二〇四〇号) |
| 一九三二(昭和七)年  |   |         |
| 1・10        | 南支方面の皇軍慰問に「女性慰問使」の特派 本派<br>の慈善協会と女青から       | (二〇七八号) |
| 1・19        | 南支那在留同胞を巡回診療慰問 西六診療所から大<br>川博士が助手薬剤士看護婦を伴って | (二〇八五号) |
| 1・30        | 上海の戦局と両本願寺 西本願寺から従軍布教使を<br>派遣 関係方面へ見舞激励の打電  | (二〇九五号) |
| 1・31        | 本派の上海別院 砲火を蒙る 光瑞師初め一同は<br>幸ひ無事              |         |
| 2・3         | 従軍布教使 愈よ二日出発                                | (二〇九六号) |
| 2・3         | 上海本願寺砲撃事件 国際法にもとると連盟理事会<br>へ抗議              |         |
|             | 本派佐世保説教所慰問救恤に奔走 上海別院の危険                     |         |

- 迫り光瑞師アスターホースへ  
従軍布教使出発  
三夜荘からも赴海 光瑞師の招電により  
(二〇九八号)
- 2・4  
動乱の上海より  
上海事変と西本願寺 佐世保に於る活動 四日追悼  
法要を執行  
光瑞師が慰問を指揮  
長崎教務所が避難民を慰問 藤谷管事以下活動  
舞鶴の将士へ軍人名号を下付 (二〇九九号)  
大谷光照師の名を以て国際連盟へ要請 上海本願寺  
の砲撃事件で  
上海事変と西本願寺 光瑞師を中心に戦死者の追弔  
と看護 婦人会も盛んに活動す  
「時局安定するまで滞留する」と光瑞師からの消息  
動乱の上海より 小笠原彰真 (二一〇〇号)  
2・7  
上海従軍記 杉形章甫 (二一〇二号)  
3・4  
上海従軍記 不安の上海より KA生 (二一二三号)  
3・5  
塹壕を匍ひつつ最前線で活動する西本願寺の上海従  
軍布教使 (二一二四号)  
3・6  
上海従軍記 不安の上海より KA生 (二一二五号)  
3・8  
陣中に手製の祭壇(一) 八勇士の霊を弔ふ記 小笠  
原彰真  
信仰の念に燃ゆる爆弾三勇士の家庭 西本願寺の弔  
問使を拜んで迎ふ 江下上等兵の手に握られた軍人  
名号  
三勇士へ特別院号 光照法王染筆を贈る  
上海従軍記(上) 不安の上海より 瀧水晋雄 (二一二六号)  
3・9  
陣中に手製の祭壇(二) 八勇士の霊を弔ふ記 小笠  
原彰真  
明日に迫った本派の追弔法要 光照法王が特に遺族  
へ挨拶 内外の頭官、関係学生参拝  
今日入洛する三勇士遺族 執行長から挨拶  
上海西別院で盛大なる追弔会  
上海従軍記(下) 不安の上海より 瀧水晋雄 (二一二七号)  
3・10  
陣中に手製の祭壇(三) 八勇士の霊を弔ふ記 小笠  
原彰真  
けふ営まれる戦死者追弔会西本願寺の準備成る 頭  
官、遺族の参拝で阿弥陀堂は人で溢れん  
爆弾三勇士の遺族 西本願寺に参拝 今日追弔会  
に遇ひたいと先づ祖前に伏して感泣する  
法王に代り親しく御礼を申し上げたい 大谷執行長と  
会见  
三勇士のお母さんが感激に打たれて語る

- 3・11 上海戦線より 豊原青雲 (二二二八号)  
 殉国の英霊を弔慰する西本願寺の大追弔法要 昨十日の陸軍記念日に 顕官、遺族等数十名参列  
 井上武子さんの上海時局講演 満堂の聴衆で盛況 (二二二九号)
- 3・12 陣中に手製の祭壇(四) 八勇士の霊を弔ふ記 小笠原彰真  
 光照法王の朗々たる表白文に満堂感泣す 殉国の英霊を追憶して涙新た 西本願寺追悼会の盛儀  
 三勇士の院号伝達式 本山真実閣で(二二三〇号)  
 松風、煙草を贈った本派の上海慰問使 司令部を訪ねて感謝さる (二二三二号)
- 3・15 築地本願寺の三勇士追悼法要 勇士の母堂を初め数千名参拝 (二二三三号)
- 3・16 上海の戦死地跡で陸海軍の追弔会 本派従軍布教使が参加  
 陸海軍巨星が西別院へ参拝  
 三勇士母堂の京都通過を見送る 昨夜本派から戦慄を覚ゆる上海兵禍の跡 本派従軍布教使活動 (二二三四号)
- 3・24 戦禍の上海で追悼法要を執行 西本願寺別院の主催で  
 宗教的なレコードを傷病兵に贈る  
 勇士の遺骨を守って両従軍布教使還る 上海本願寺
- 3・25 最後の読経 (二二三九号)  
 戦死者慰霊のため連日の奔走 上海に於ける西本願寺の活動  
 爆弾三勇士の村葬日取決定 本派本願寺導師特命  
 上海西本願寺別院で忠死者追悼法要を執行 白川・野村両司令官以下参拝 (二二四〇号)
- 3・26 凱旋将士の歓迎を全国管事へ通牒 西本願寺が更らに労を稿ふ (二二四一号)
- 3・27 肉弾五勇士の大坪上等兵本葬 本派本願寺から弔慰  
 戰場唯一の慰めを勇士達に喜ばれた 本派本願寺の従軍布教使 豊原、瀧水両氏帰る (二二四二号)
- 3・29 三勇士本葬 本派から調声特命 (二二四三号)
- 3・31 心強い皇軍の意気 上海から帰洛の瀧水従軍布教使語る (二二四五号)
- 4・2 上海現地の追弔法要 八雲従軍布教使の活動 (二二四七号)
- 4・7 教界の春 三勇士感激の春 本派本願寺 (二二五一号)
- 4・10 上海古戦場を飛行機で弔ふ 本派従軍布教使が (二二五四号)
- 4・13 上海の西本願寺慰問講演に大童 飛行機で戦禍の跡を見る (二二五六号)

4・20	上海の経済事情は回復の見込み立たぬ 八雲本願寺 布教使の消息 (二二六二号)	一九三三(昭和八)年
4・26	大谷光瑞師上海へ出発 肉弾三勇士の遺骨を西大谷本願寺に納む きのふ、分 骨を迎へて	2・23 江南の花散りし三勇士一周忌 本派本願寺で厳修 陸軍記念日に除幕の三勇士の墓碑 西大谷に建立 大阪少年連合で三勇士祭り (二四一五号)
4・29	肅やかに殉国英霊の栄光に輝く廟地 (二二六七号) 今後の上海は経済問題だ 本派八雲従軍布教使帰来 談 (二二六九号)	3・11 大谷墓地肉弾三勇士建碑除幕式 陸軍記念日で将星 集る 三勇士遺族と本山重役会見 永代経に壺千円献納 三勇士の遺族が (二四二九号)
5・14	上海戦跡参拝(上) 在上海 梶原正修 (二二八一号)	4・13 上海の団参三勇士墓参 十二日午後四時 (二四五五号)
5・15	上海戦跡参拝(中) 在上海 梶原正修 (二二八二号)	4・15 三勇士墓地に於ける上海婦人団の感激 (二四五七号)
5・17	上海戦跡参拝(下) 在上海 梶原正修 (二二八三号)	5・31 本派上海別院吉例降誕会 (二四九四号)
5・24	私は在留邦人の女房役に 本派上海別院小笠原輪番 談 (二二八九号)	10・4 地方ニュース 上海通信 (二六〇一号)
5・25	上海事変講演の旅より 豊原青雲 (二二八九号)	一九三四(昭和九)年 (二七三六号)
6・5	上海事変講演の旅より 豊原青雲 (二二八九号) 肉弾三勇士の墓碑建立費 全末寺に喜捨を求む 西 本願寺有志が発起 (二七九〇号)	5・27 創設三周年祝賀披露 本派上海別院で (二七九〇号)
11・2	上海西本願寺が軍人慰問部を特設 在留民にも日用 品配給 (二二〇〇号) 肉弾三勇士の建碑敷地決定 西大谷西川氏墓所の一 部 近くいよいよ起工する (二三二七号)	一九三五(昭和一〇)年 6・13 日華仏教研究会訪支団の消息 上海にて 小島恵見 (三一〇一号) 6・14 日華仏教研究会訪支団の消息 谷大教授 小島恵見 (三一〇二号)



- |      |   |      |   |
|------|---|------|---|
| 6・19 | 日華仏教研究会訪支団の消息<br>六月十二日上海にて<br>小島恵見<br>(三一〇六号) | 8・17 | 支那遊記日録(十六)<br>岩井諦亮<br>(三一五七号)   |
| 6・21 | 日華仏教研究会訪支団の消息<br>六月十五日上海にて<br>小島恵見<br>(三一〇八号) | 11・6 | 事変後の上海小見<br>在上海 秦如晨<br>(三二二三号)  |
| 7・2  | 支那遊記日録<br>日華仏教研究会渡支委員 牧田諦亮<br>(三一七号)          | 1936 | (昭和一一)年   |
| 7・3  | 支那遊記日録<br>日華仏教研究会渡支委員 牧田諦亮<br>(三一八号)          | 2・7  | 支那仏教俗譚 岩井諦亮<br>(三二九四号)  |
| 7・4  | 支那遊記日録<br>日華仏教研究会渡支委員 牧田諦亮<br>(三一八号)          | 6・26 | 海外布教線を巡る 四 揚子江を遡る<br>平等通昭<br>(三四一〇号)  |
| 7・11 | 日華仏教研究会渡支団一行消息<br>蘇仙生<br>(三一五号)               | 7・4  | 海外布教線を巡る 五 上海港<br>平等通昭<br>(三四一七号)   |
| 7・17 | 支那遊記日録(一)<br>日本仏教研究会渡支委員 岩井<br>諦亮<br>(三三三〇号)  | 7・5  | 海外布教線を巡る 六 上海西別院<br>平等通昭<br>(三四一八号)   |
| 7・21 | 支那遊記日録一 岩井諦亮<br>(三三三四号)                       | 7・7  | 海外布教線を巡る 七 平等通昭<br>(三四一九号)  |
| 7・23 | 支那遊記日録二 岩井諦亮<br>(三三三五号)                       | 7・9  | 海外布教線を巡る 八 平等通昭<br>(三四二一号)  |
| 7・27 | 支那遊記日録(三) 岩井諦亮<br>(三三三九号)                     | 8・1  | 海外布教線を廻る さらば上海<br>平等通昭<br>(三四四一号)   |
| 7・28 | 支那遊記日録(五) 岩井諦亮<br>(三三四〇号)                     | 8・2  | 海外布教線を廻る 平等通昭<br>(三四四二号)  |
| 7・30 | 支那遊記日録(六) 岩井諦亮<br>(三三四一号)                     | 1937 | (昭和一二)年   |
| 7・31 | 支那遊記日録(七) 岩井諦亮<br>(三三四二号)                     | 8・21 | 日支事変従軍僧 本派は三四名に達す<br>法王一行は<br>海路平穩、元氣一杯で きのふ正午・門可出帆<br>(三七五七号)  |
| 8・1  | 支那遊記日録(八) 岩井諦亮<br>(三三四三号)                     | 8・22 | 支那僧が涙の感謝 芸妓水葬の導師もした<br>漢口か<br>らの避難僧 本派の白石頭照氏談<br>上海の皇軍慰問に本派から連枝を急派<br>従軍布教使<br>数名も随行する 近日中に京都を出発<br>(三七五八号) |
| 8・2  | 支那遊記日録(九) 岩井諦亮<br>(三三四四号)                     |      |   |

8・24	上海慰問使は軍籍の連枝 準備進む (三七五九号)	10・12	敵の迫撃砲破片本派上海別院へ落下 幸に屋根を破
8・25	宣暢院連枝 上海へ慰問 (三七六〇号)	10・14	損の程度 本派の伊藤従軍僧日より (三八〇〇号)
8・26	本派の上海慰問使に内定の藤枝連枝応召の誉れ け ふ両都の精神作興講演会前景気・上々	10・15	遺骨の中に名号 上海の西本願寺別院 伊藤普行主 任婦朝談 (三八〇二号)
	上海、青島、済南の三駐布よりの「報告書」 上海別 院は半倒壊の惨状 (三七六一号)		小笠原主任を迎へ 本派上海別院・新陣容 臨時事 務所役員決定 従軍僧の部隊付整備
8・31	本派の上海慰問使二布教使・けふ先発 富永、関の 両氏元氣一杯 連枝は近くに出発	10・20	前線の兵へ御土産 二十包を預かる 上海西本願寺 従軍僧 林豊城氏近く帰任 (三八〇三号)
9・1	居留民を埋葬する 本派上海別院 (三七六五号)	10・28	山立全女学校から皇軍慰問の手紙、募集 上海戦線 への贈り物 本派慰問第二課・活動 (三八〇七号)
9・4	三一日夜 上海慰問使 京都駅出発 (三七六六号)		上海の戦線で『本願寺さん』戦死 法悦に輝くその 人となり (三八一四号)
9・7	上海の慰問 伊藤氏報告より (三七六九号)	10・29	上海戦線の大捷で両本願寺より祝電 (三八一五号)
9・9	砲煙弾雨の中に呉淞砲台の戦死者収骨 両慰問使上 海に到着 伊藤普行氏通信 (三七七一号)	11・2	上海戦線より 防毒マスクに全員身を固める 西本 願寺の従軍僧 (三八一八号)
	敵機関銃の猛射を浴びつつ 言語に絶す悪路難行 行方不明の伊藤輪番を尋ねつつ 本派の脇坂了教従 軍僧日より (三七七三三号)	11・11	明治節に麦赤飯 松井將軍一詩を賦す 上海戦線慰 問に活躍の本派小笠原総長に示す 光瑞師の贈物！ 茄子の漬物大歓迎 十三樽を上海 の第一線へ 配給の従軍僧日より 別院よりの手拭鉢巻に極楽栄転を志す 柱松念仏部 隊 (三八二五号)
9・17	収骨や慰問に活動上海の慰問使、駐布 連日の奮闘 めざまし (三七七八〇号)		
9・23	上海最前線を慰問 本派関・富永従軍僧・中間報告 (三七八五号)		
9・29	本派上海別院従軍僧近況 (三七八九号)		
10・3	小笠原彰真氏 上海へ出発 (三七九三三号)	11・23	上海方面の陸海軍慰問に西本願寺光照法王渡支 二 九日京都発、二週間の日程で 随行は後藤執行、中 井司令官の弔歌 (三七九六号)
10・7	本派上海別院にて第一回還送遺骨告別式 悲し・松 井司令官の弔歌 (三七九六号)		神教務部長と侍僧

- 上海へ従軍僧 一名増派 (三八三五号)
- 12・10 上海での光照法王 寧日なき活動 後藤隨行長報告 (三八四九号)  
(第一信)
- 12・16 蘇州上海間、二日の往復 住民は日本人へ挙手の礼 蘇州復興の自治委員に面会す 上海にて 坪田本社特派員発 (三八五四号)
- 一九三八(昭和一三)年
- 2・9 上海西本願寺別院裏に仮奉安所新築 遺骨還送に遺漏なく 軍部と協議万全を期す (三八九四号)  
上海本願寺が支那人カード階級へ宣撫の手 堀総長導師の慰霊祭 (三八九四号)
- 2・13 朝香中将宮殿下より 別院婦人へ賜菓 光栄に輝く 遺骨整理班 本派上海別院の婦人達 (三八九七号)
- 3・11 上海龍華寺に支那僧を訪ふ 日蓮宗慰問僧を同行して 在上海 坪田本社特派員 (三九一九号)
- 12・14 中支宗教大同連盟 新春早々結成式を挙ぐ 上海に事務所を設け大活動への準備成る 仏基神三教の歴史的提携 支那仏教に活力を 近く帰任の小笠原氏談 (四一五〇号)
- 12・16 中支宗教工作 社会事業懇談会 菅野中佐の主権 中支社会事業に就き社会事業家と懇談会 中支宗教連盟で日支宗教大会計画 (四一五二号)
- 一九三九(昭和一四)年
- 2・3 中支大同連盟発会式は今月下旬に上海で挙行 事変直後の面影なき復興振 妙心の中支開教使連盟後藤瑞巖氏談 (四一八八号)
- 3・4 神、仏、基九十三派の中支宗教大同連盟発会式 真に東亜宗教の結成へと 近衛文隆氏、総裁の謝辞代読 去る二七日挙行 (四二二二号)
- 一九四〇(昭和一五)年
- 1・22 中支宗教大同連盟業務報告 (四四七二号)
- 1・23 中支宗教大同連盟業務報告二 (四四七三号)
- 1・27 中支宗教大同連盟業務報告三 (四四七七号)
- 1・28 中支宗教大同連盟業務報告四 (四四七八号)
- 1・30 中支宗教大同連盟業務報告五 (四四七九号)
- 1・31 中支宗教大同連盟業務報告六 (四四八〇号)
- 2・1 中支宗教大同連盟業務報告七 (四四八一号)
- 2・2 中支宗教大同連盟業務報告八 (四四八二号)
- 2・3 中支宗教大同連盟業務報告九 (四四八三号)
- 2・4 中支宗教大同連盟業務報告十 (四四八四号)
- 2・8 重要な支那布教権問題 仏連、外務、興亜院等と 窃かに折衝し解決に動く (四四八七号)
- 2・15 興亜宗教工作上速に解決を要する支那布教権の問題 仏連初め有志仏教徒起つか (四四九三号)
- 2・20 支那布教問題 仏教連合会本部に解決活動を要望 中支宗連北京仏連から 新政権樹立を機会に 仏教時局同志会が支那布教権問題協議

6・4 日本仏教にも支那布教権を認める (四四九七号)  
 本派三氏と周外

交次長の交歓

(四五八三号)

一一

『教海一瀾』については、明治三二(一八九九)年一月から昭和一二(一九三七)年一二月まで、『文化時報』については、大正一三(一九二四)年六月から昭和一五(一九四〇)年六月までの上海に関する記事を拾ったが、龍谷大学図書館では、『教海一瀾』については、明治三〇(一八九八)年七月二五日発行の第一号から昭和一二(一九三三)年八月二五日発行の第八七〇号までを網羅しているものの、『文化時報』については、大正一三年六月二日発行の第一一五号からの所蔵であり、この限定を受けている。また、年代的にも昭和一五年六月までで一応区切っている。『本願寺新報』などにも、これ以降終戦までの上海に関する記事が見られることと推測するが、時間的に余裕がなかったこと、また内容的に中国における布教権問題との関係で切りがよいと判断したので、ここで中断することにした。この点もご了解をいただければ幸いである。

記事の繁がりから言えば、重複する年代があるものの、『教海一瀾』の後を『文化時報』が受け継いでいる。また量的には、『教海一瀾』よりも『文化時報』の方が多くの上海開教関係記事を掲載しているようであるが、この範囲で、浄土真宗本願寺派と上海との関わりの事績を一覧すると、そこにいくつかの種類を見出すことができる。

(一) 以上の記事において、最も多いのは「慰問」に関する記事である。上海という地は、中国における開教の入り口であると同時に拠点でもあったが、これに関する記事はむしろ少なく、圧倒的に戦時における「慰問」関係記事で両紙とも占められている。「慰問」という営為をどのように捉えるかは、議論の分かれるところであろうが、直接的・狭義には、戦火で避難した在留邦人および日本の軍隊に対して、開教使が物質的・金銭的・精神的な支援を与える営為を指

し、間接的・広義には、そのためのあらゆる便宜を指すと考えられる。前者では、大谷光瑞猊下や大谷光照法王・御裏方、井上武子女史が、中国に渡り慰問の指揮を執ることもあり、後者では、本山から慰問のための特使・連枝を派遣したり、従軍布教使を増員したり、上海別院に臨時部や軍人慰問部を特設して、その体制を固めるということが見られた。この営為が現地の人々に向けられる時、「宣撫」となる。『文化時報』の三八九四号に「上海西本願寺が支那人カード階級へ宣撫の手」というのがあるが、「宣撫工作の一助として軍の残飯を貰ひ受け、飢餓に悩む支那人カード階級へ配給を開始、大いに支那人から感謝されている」と報じている。

総じて「慰問」、「宣撫」という営為は、在留邦人や軍人および現地の人々に対する福祉の意味と、この営為を梃子にして国家の軍事的拡張政策に便乗して開教の教線拡張を実現し、または企図する戦略的意味とが裏表の関係にあったと洞察されるのである。

(二) また、戦死者の追悼法要に関する記事も多い。上海別院での追悼(弔)法要・追弔会、還送遺骨告別式、戦死地跡での陸海軍の追弔会への従軍布教使の参加、軍葬の引き受けなどである。戦死者に対する供養という点から言えば、戦死者や在留民の死者の収骨、名号・院号・法名の付与ないし下付、弔慰状の贈呈などもここに含めることができよう。

(三) このことと関連して特に注目されるのは、「肉弾三勇士」の記事である。上海事変における廟行鎮付近の戦いにおいて、爆弾を抱えて鉄条網を破壊した作江・北川・江下の三上等兵の行動は、戦争への士気を高める象徴として全国的に称賛されたが、この三人がそろって本願寺派の出身であった。本山としても、特別的にこのことを扱って、墓碑をつくり、かれらに特別院号を与え、遺骨を大谷本廟に納めしたのである。昭和七・八年に、この記事が次々と掲載されている。ただ、上海別院の従軍布教使・小笠原彰真は、「三勇士」ばかりでなく、その時の作業で戦死した五人も含めて「八勇士」に対して「陣中に手製の祭壇」を設けて壺を弔った手記が掲載されていることも注意を引く。

(四) 上海別院に対する直接砲火の記事も衝撃的である。昭和七年一月三十日朝、「上海別院ニ砲彈落下ス、猊下御無

事」との入電が本山に入ったという。折しも、大谷光瑞殿下が上海に滞在中であったことから、より大きく取り上げられることになった。そして、このことは、万国国際公法に違反することとして国際連盟に抗議していることも着目される。

(五) こうした戦況を報告・講演している記事も、これらと連関している。「上海従軍記」や「上海方面従軍日記」、「上海戦跡台拜」、「上海戦線より」、「動乱の上海より」、「本派上海別院従軍僧近況」、「上海事変講演会」、「上海事変講演の旅より」、「上海時局講演」、従軍布教使の「帰来談」などである。いずれも、皇軍の活躍、従軍布教使の辛苦の活動を伝え、読者・聴衆に対して戦争への協力を訴える内容で一面的の様相である。

以上五種類の戦時体制下の記事が、浄土真宗本願寺派の上海関係記事の全体傾向を規定している。明治四四(一九一一年)の辛亥革命、昭和七(一九三二)年の上海事変、昭和一二(一九三七)年の日中戦争時に、記事が山を成しているのである。

(六) 「上海教況」・「上海龍谷会発会式」・上海在留民の門徒組織「光壽会の活動」・「上海別院の新築定礎式」・「本願寺上海別院の設置」・「本願寺上海別院の落成慶賀法要」・「上海別院降誕会」・「創立三周年祝賀披露」などの記事があるにはあるが、具体的に上海出張所・別院が日常的にどのような活動をしていたのか、そのことと在留邦人の生活とはどのように結びついていたのか、また現在の中国人との日常的なつきあいはどうであったのかなど、上海租界地における本派開教使、在留邦人、中国人などの「日常の顔」は、こうした全国的新聞においては当然といえば当然であるが、あまり見えてこない。本共同研究の課題には、開教使の日本語教育などの「教育関係記事」の蒐集も一方の極としてあるのであるが、「上海」という地点に限定して抜粋すると、この記事を見出し得たものは、今まで見た範囲では皆無なのである。

(七) けれども上海の一般的情景・宗教的動静や感想は、「旅行記」の形式で見られる。特に本派の場合、大谷光瑞親

下が中国開教の視野から上海に当初より関心を寄せ、度々足を運ぶことになるが、『教海一瀾』では「支那御巡錫記」の連載から上海関係記事が始まっている。「清国通信」もこれに連動しているが、本派開教使の旅行記としては、牧田（岩井）諦亮の「支那遊記日録」、本派留学生の旅行記としては、平等通昭の「海外教線を廻る」などがある。

(八) また「上海通信」は、在留邦人の仏事や活動を僅かながら伝えている。日本人倶楽部、上海別院での讚仏会、仏教婦人会・仏教青年会・女子青年会・少年団の活動模様を時として伝えている。

(九) しかしそれにしても、中国・上海の現地の人々との関わりの記事は全くと言ってよいほど出てこない。ここでは『文化時報』が、昭和六年九月の大洪水に際して、日本の仏教連合会が上海の中華仏教会に対して義援金を送り、感謝状が届いたとの報道が見られるが、これには本願寺派以外に大谷派や天台宗なども加わっている。「租界地」という特有の生活空間が、中国人との交渉を隔離的にしたことは事実であろうが、中国人と本派との関わりの事績について、今後検討する余地があると考えられる。

この点に関して、「布教権問題」という制度上の制約があったことは事実である。中国においては、国内の布教を許可したのはキリスト教であって、日本仏教に対しては認めていなかった。例えば、大正一五年七月一日の『文化時報』は、「支那における布教権問題」と題して次のように述べている。「(北京順天時報社長渡辺哲信)氏の談に依れば先年大隈内閣の時加藤外相より要求したる二十一ヶ条中特殊五項の一なる布教権問題は当時英国の抗議に依つて不成功に終つたが併し民国元年の約法に依つて信教自由を認めて居るので我が仏教者が仏教の布教をなすことは差支なき所なるも彼の基督教宣教師の如く土地を所有し寺院を建設する事及び旅行免状を有せずして自由に国内を旅行する事等は出来ず夫れ丈不便な訳である」。

しかし、これが認められる時期が来る。昭和一五年六月四日の『文化時報』の「日本仏教にも支那布教権を認める 本派三氏と周外交次長の交歓」の記事である。「多年に亘り布教権問題は日本宗教界の宿題とし難問題として取扱はれて居

たが日本宗教の布教権を言質を得たるはそこに大なる収穫であった。その後の経緯については、今後の研究課題であるが、日本軍の占領による中国支配の力学から引き出された言質であった。

(十) そして、この力学の重要な支点になっているのが、「中支宗教大同連盟」の樹立ということではなかったか。上海の仏教徒について昭和一三年一月四日の『文化時報』は、「中支宗教大同連盟 新春早々結成式を挙ぐ 上海に事務所を設け大活動への準備成る 仏基神三教の歴史的提携」との見出しで大きく報じ、「この連盟は軍が従来動もすれば足手纏とした宗教と自ら進んで提携し、宗教を以つて宣撫工作の根幹になさんとする軍としても画期的なものであり、教家としてはこの絶務機を心から歓迎し宗教家として国策に沿つて宗教が東亜文化の建設に自ら一翼を買つて軍の事業に参画し国策に参与せんとするものである」と記している。この連盟が、中国の仏教徒をも巻き込んだの日華仏教会の成立と連関してくるが、宗教宗派間、宗教と軍事間の一丸となつた連携がここに見られるのである。この連盟の具体的な活動模様については今後の研究課題とならう。

浄土真宗本願寺派の上海開教は、明治三八(一九〇五)年二月、開教総監部を設けたことにより本格化するが、全般적으로는度重なる戦争に色濃く規定された。そして、「昭和二〇年一〇月初旬、湯恩伯將軍により接収された上海別院は、そのまま博物館として使用され別院に終止符が打たれた」(安田至道「清国(中南支)開教の沿革」海外開教要覧刊行委員会編『海外開教要覧―海外寺院開教使名簿』同朋舎、昭和四九年、二二〇頁)という。さらに上海関係記事の蒐集を継続し、また範囲も中国全土からアジアへと拡大して、浄土真宗本願寺派の開教の事績を全体的に把握することにより、その時代的意味と今日に与える示唆を考察したいと考えている。

〔付記〕『教海一瀾』の記事蒐集については、龍谷大学非常勤講師の柴田幹夫氏(中国語担当・東洋史専攻)にお世話になった。記して深謝したい。